

27:57 夕方になって、アリマタヤの金持ちでヨセフという人が来た。彼もイエスの弟子になっていた。
27:58 この人はピラトのところに行って、イエスのからだの下げ渡しを願った。そこで、ピラトは、渡すように命じた。 27:59 ヨセフはそれを取り降ろして、きれいな亜麻布に包み、 27:60 岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた。墓の入口には大きな石をころがしかけて帰った。 27:61 そこにはマグダラのマリヤとほかのマリヤとが墓のほうを向いてすわっていた。 27:62 さて、次の日、すなわち備えの日の翌日、祭司長、パリサイ人たちはピラトのところを集まって、 27:63 こう言った。「閣下。あの、人をだます男がまだ生きていたとき、『自分は三日の後によみがえる』と言っていたのを思い出しました。 27:64 ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと、弟子たちが来て、彼を盗み出して、『死人の中からよみがえった』と民衆に言うかもしれません。そうすると、この惑わしのほうが、前の場合より、もっとひどいことになります。」 27:65 ピラトは「番兵を出してやるから、行ってできるだけ番をさせるがよい」と彼らに言った。 27:66 そこで、彼らは行って、石に封印をし、番兵が墓の番をした。

28:1 さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。 28:2 すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。 28:3 その顔は、いなずまのように輝き、その衣は雪のように白かった。 28:4 番兵たちは、御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。 28:5 すると、御使いは女たちに言った。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。 28:6 ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらんください。 28:7 ですから急いで行って、お弟子たちにこのことを知らせなさい。イエスが死人の中からよみがえられたこと、そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれ、あなたがたは、そこで、お会いできるということです。では、これだけはお伝えしました。」 28:8 そこで、彼女たちは、恐ろしくはあったが大喜びで、急いで墓を離れ、弟子たちに知らせに走って行った。 28:9 すると、イエスが彼女たちに出会って、「おはよう」と言われた。彼女たちは近寄って御足を抱いてイエスを拝んだ。 28:10 すると、イエスは言われた。「恐れてはいけません。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えるのです。」 28:11 女たちが行き着かないうちに、もう、数人の番兵が都に来て、起こった事を全部、祭司長たちに報告した。 28:12 そこで、祭司長たちは民の長老たちとともに集まって協議し、兵士たちに多額の金を与えて、 28:13 こう言った。「『夜、私たちが眠っている間に、弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った』と言うのだ。 28:14 もし、このことが総督の耳に入っても、私たちがうまく説得して、あなたがたには心配をかけないようにするから。」 28:15 そこで、彼らは金をもらって、指図されたとおりにした。それで、この話が広くユダヤ人の間に広まって今日に及んでいる。 28:16 しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行って、イエスの指示された山に登った。 28:17 そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑った。 28:18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。 28:19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、 28:20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

導入

私たちの教会に毎週来ている方はご存じのとおり、過去 5 週間はマタイが語るイースターのお話を学んできました。

今日はその最終回です。

この個所で、マタイはおもに 3 つの出来事にスポットを当てます。

1. イエスの遺体の埋葬
2. イエスのからだの復活
3. あらゆる国の人々を弟子にしなさいというイエスからの命令

1. イエスの遺体の埋葬 (27 : 57-66)

多くの説教者や聖書を教える教師は、イエスの遺体の埋葬の個所をあまり重要視せずに説教では省きます。

しかし、マタイがこの出来事について伝えたかったことは明らかですから、これを見逃してはいけません。

この個所を学び始める前に、聖書の神が世界をふたつの方法で支配なさることを理解しておきましょう。

そのふたつの方法とは、「奇跡」と「神の主権による摂理」です。

神がこの世でご自身のみこころを成就なさるために、神ご自身が定められた自然界の法則に超自然的な方法で介入なさることがあります。

重力の法則など、自然の法則と呼ばれるものをくつがえされる場合があります。

神がそのように働かれるとき、科学的に説明できないので、「奇跡」と呼ばれます。

神は、ご自身のみこころを成就なさるために「奇跡」を起こすことがおできになります。

聖書には、神が奇跡を起こしてご自身の目的を果たされた例が数多く記されています。

神は、災いと葦の海を分けるという奇跡を起こして、エジプトの奴隷生活から 300 万人ものユダヤ人を救い出されました。

また、その 300 万人を、食糧や衣料を買う店もない荒野で 40 年間養ってくださいました。

聖書は、民の履物すらすり切れなかったと語ります。

神はヨシュアが戦いに勝利し、神のみこころを果たすために、太陽の動きを留められました。

また、地面が口を開き、コラとその仲間たちを飲み込むようになさいました。

サムソンには、ひとりで千人の敵を倒せるほどの並はずれた身体能力をお与えになりました。

斧を水面に浮かばせたり、ろばに言葉を話させたりもなさいました。

そして、エリヤは火の戦車に運ばれて、死なずに天国へ連れていかれました。

お腹を空かせた獅子の口を閉ざし、ヨナを飲み込ませるために大きな魚を用意なさいました。

そして、魚のお腹の中で 3 日間ヨナを過ごさせられましたが、ヨナは無事でした。

まさに、神は奇跡をとおしてご自身の目的を果たすことがおできになります。

次に、神は「神の摂理」によってご自身のみこころを成就なさいます。

ここでまず考えなければならないのは、「神の摂理」の意味です。

「神の摂理」とは何でしょう。

それは、良いことも悪いことも、通常起こる出来事をとおして神がご自身の目的を果たされることです。

聖書の例を挙げて説明するとわかりやすいでしょう。

ヨセフはヤコブの 12 人の息子たちのひとりでした。彼らは、神がアブラハムと交わされた契約を成就すべく生まれた息子たちです。

ヨセフは兄たちから妬まれ、嫌われたことが原因で、エジプトに連れていかれ、奴隷となりました。

また、雇い主の妻に言い寄ったと濡れ衣を着せられ、投獄されました。

王の夢を読み解いたことで、ヨセフはエジプトの高官となり、自分の家族を飢きんから救うことができました。

この一連の話に、明らかな奇跡はありません。

神は何もしておられないようにさえ思えます。

しかし、神は主権者としての摂理によって、ヨセフの人生のすべてを指揮しておられました。

最終的にヨセフは、この驚くべき真理を悟り、次のように語りました。

「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。」 (創世記 50 : 20)

旧約聖書の知恵の書を記した著者はこう言います。

「人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは【主】である。」 (箴言 16 : 9)

パウロはピリピ 2 : 13 でこう語ります。

「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」

イエスの埋葬の中に、あらゆる出来事のうちに働く神の摂理を見ることができます。

マタイは、イエスの埋葬について語る中で、ふたつの預言の成就に焦点を当てます。ひとつめはイザヤによる預言であり、もうひとつはイエスご自身による預言です。

では、イザヤ書 53 : 9 を読みましょう。

イザヤ 53:9 彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。

イザヤがこう預言したのは、この出来事が起こる約 700 年前です。ですから、実際にイエスが埋葬されるまで、この預言がどういう意味かを理解することは誰にもできませんでした。

聖霊がイザヤに啓示したのだということがわかります。

イエス・キリストに敵対する人々は、イエスをただの犯罪者として埋葬しようとしたが、神のご計画はそうではありませんでした。

神のご計画は、イエスが裕福な人の墓に埋葬されることでした。

そして、神の摂理によって、そのとおりにになりました。

適切な時に、神は敬虔で裕福な人の心を動かし、ピラトのもとに行って、イエスの遺体の引き取りを申し出るようになさいました。

通常、埋葬のために遺体を引き取れるのは家族だけです。

ですから、親類でもない人が埋葬のために遺体を引き取るのは異例です。

しかし、ピラトはイエスの遺体をアリマタヤのヨセフに渡すよう命じました。

アリマタヤのヨセフに関する情報は、金持ちで、密かにイエスの弟子になっていたということだけです。（ヨハネ 19 : 38）おそらくイエスの起こされた奇跡を見たり、イエスの教えを聞いたりしたことがあったのでしょう。

また、イエスの埋葬の一件に関わる様子から、彼が謙虚で、イエスに心をささげていたことがわかります。

ヨセフはニコデモといっしょに、イエスの遺体に没薬や香料を塗りました。（ヨハネ 19 : 38-42）

イエスの埋葬で成就したふたつめの預言は、イエスご自身が語られたものです。

マタイ 12 : 40 を読みましょう。

マタイ 12:40 ヨナは三日三晩大魚の腹の中にいましたが、同様に、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。

この預言が成就するためには、イエスは 3 日間埋葬されていなければなりません。

イエスが 3 日間埋葬されたのは、周囲を取り巻く人々や状況をとおしてご自身のみこころを成就する神の摂理によることです。

すべては、当時のユダヤの律法に則していました。

聖書に記された出来事について読んでも、その裏で働いている神の御手は見えません。しかし、神がおっしゃったとおりに預言が成就するためには、起こることすべてを神が掌握しておられなければなりません。誰もそうと気づかないうちに、神がご自身の目的を果たしておられるのです。

適用

イエスの埋葬の際にご自身の目的を果たされた神は、私たちの人生においてもご自身の目的を果たすべく働いておられます。これは、私たちにとって励みとなります。

私たちは年齢を重ねるにつれ、人生を振り返って神の御手が私たちの人生を導いてくださったことを思い起こすことができます。

メアリー・ステーブンソンさんが書いた詩は、この事実を鮮やかに描きます。

ここでご紹介しましょう。「足跡」という詩です。

ある夜、わたしは夢を見た。

わたしは、主とともに、なぎさを歩いていた。
暗い夜空に、これまでのわたしの人生が映し出された。
どの光景にも、砂の上にふたりのあしあとが残されていた。
ひとつはわたしのあしあと、もう一つは主のあしあとであった。
これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、
わたしは、砂の上のあしあとに目を留めた。
そこには一つのあしあとしかなかった。
わたしの人生でいちばんつらく、悲しい時だった。
このことがいつもわたしの心を乱していたので、
わたしはその悩みについて主にお尋ねした。

「主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、
あなたは、すべての道において、わたしとともに歩み、
わたしと語り合ってくださいと約束されました。
それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、
ひとりのあしあとしかなかったのです。
いちばんあなたを必要としたときに、
あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、
わたしにはわかりません。」

主は、ささやかれた。

「わたしの大切な子よ。
わたしは、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。
ましてや、苦しみや試みの時に。
あしあとがひとつだったとき、
わたしはあなたを背負って歩いていた。」

では、次の個所に進む前に、62-65 節に注目しましょう。

マタイは、次の日、通常は仲の悪い祭司長とパリサイ人たちが、ローマ総督ピラトのところに一緒に行くと語ります。彼らは、イエスが 3 日後によみがえると預言しておられたことで不安を抱いていました。

イエスが 3 日後に本当によみがえるとは思っていませんでしたが、弟子たちが墓からイエスの遺体を盗んで、よみがえったと嘘を言うだろうと考えました。

ピラトは、ローマ兵に墓の見張りをさせました。

ユダヤの宗教指導者たちがピラトに頼んで墓の見張りをつけさせたことは、イエスの復活を証明する上でかえって有利に働きました。

当時の法律では、ローマ兵が見張りをしていて囚人が逃げた場合、番をしていたローマ兵は処刑されることになっていました。

ですから、墓はしっかり警備されていて、弟子たちがイエスの遺体を盗むことはできませんでした。

2. イエスの身体の復活 (28 : 1-10)

イースターのメインテーマは、イエスの身体の復活です。

これは、世界の歴史上、もっとも偉大な出来事です。

イエス・キリストの復活がなければ、キリスト教の信仰はありません。救いも、未来への希望もありません。

パウロはコリントの教会に宛てた手紙で、「もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。」(コリント第一 15 : 19) と語ります。

ですから、ペテロが五旬節に聖霊で満たされた後、最初に語った教えがイエス・キリストの復活についてであったのは、当然です。

偉大な使徒パウロは、イエス・キリストの復活を告げ知らせることに注力しました。

私たちクリスチャンが未来に抱く希望はすべて、ヨハネ 11 : 25 のイエスのことばに基づいています。

ヨハネ 11:25 イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。

ヨハネ 14:19 いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるのです、あなたがたも生きるからです。

福音書の著者 4 人は、それぞれイエスの復活を違った角度から描きます。復活に対するマタイのアプローチは、学術的でも歴史的でも分析的でもありません。彼は、イエスを深く愛した女性たちの心の動きに注目しました。では、イエスの復活についてマタイが何を教えているか、考えていきましょう。1-10 節を、女性たちの心を物語る 5 つの部分に分けてお話しします。

- a) あわれみ —1 節には、マグダラのマリヤと他のマリヤが早朝夜明け前にイエスの埋葬された墓を見に行くとあります。

他の女性たちもいましたが、マタイはこのふたりのマリヤに注目します。

マグダラのマリヤは福音書に 14 回登場しますが、そのうちの 8 回は、他の女性といっしょに登場します。

彼女は、イエスを応援していた女性のリーダー的存在だったようです。

ルカは、7 つの悪霊を追い出していただいたのがこのマリヤだと言います。しかし、過去にはこのマリヤが遊女だったと書いた著者もいましたが、聖書にはそれを裏付ける証拠はありません。

マグダラのマリヤが、イエスを深くいつくしみ、愛した女性だったことは確かです。他のマリヤとは、ヤコブとヨセフの母親で、クロパの妻です。(マタイ 27 : 56、ヨハネ 19 : 25)

彼女たちは何のために墓を訪れたのでしょうか。

ルカはルカ 24 : 1 で、イエスの遺体に塗るための香料を持ってきたと語ります。

彼女たちはイエスが復活すると確信していませんでしたが、イエスを深くあわれんでいました。

ユダヤの伝承では、亡くなった人のたましいが 4 日後に身体から去ると信じられていました。もしかすると、彼女たちはこの伝承を信じていたのかもしれませんが。

ふたりが最初に感じたのがあわれみだったとすると、次に感じたのは、恐れでした。

- b) 恐れ (2-7 節) —2-7 節で、マタイは女性たちが体験したことを記しています。

まず、大きな地震が起こりました。日本ではよく地震が起こりますが、初めて地震を体験したら、とても怖いでしょう。

そして突然、天から御使いが現れて、墓を封じていた石を転がしました。

ふたりの女性はさぞ驚いたことでしょう。

御使いは、いなずまのように輝いていて、その衣は雪のように真っ白でした。

兵士たちはあまりの衝撃に動けなくなりました。

おそらく、精神的にフリーズしてしまったのでしょう。

その光景を見て、完全にショック状態になりました。

女性たちは怖がりましたが、御使いはふたりに言葉をかけて励ましました。

「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらんください。ですから急いで行って、お弟子たちにこのことを知らせなさい。イエスが死人の中からよみがえられたこと、そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれ、あなたがたは、そこで、お会いできるということです。では、これだけはお伝えしました。」

ふたりの女性が次に感じたのは喜びでした。

- c) 喜び (8 節) — 彼女らは御使いの言葉に従って墓を離れました。その心には、大きな喜びがありました。
- d) 礼拝 (9 節) — 9 節には、ふたりが弟子たちに伝えに行く途中でイエスと出会ったとあります。ふたりはイエスの足を抱きしめて拝みました。
- e) 希望 (10 節) — イエスは御使いと同一言葉を語られました。この言葉から、彼女たちは未来への希望をもらいました。イエスは、後からガリラヤで会うと約束してくださいました。彼女たちはイエスの言葉をやっと思信することができました。マタイはイエスの復活に関わる女性たちの体験に注目していますが、そうすることによって何を伝えようとしているのでしょうか。これはなかなか難しい質問です。マタイはユダヤ人の読み手を想定して福音書を記しました。ユダヤ人の考え方では、女性に注目するというのは珍しいことです。わかっているのは、男性の弟子たちはイエスが捕えられた時に全員イエスを見捨てたということです。一方、女性の弟子たちは、最後までイエスを支持しつづけました。イエスは、復活して最初にご自身を現すことによって、女性たちの忠誠心に報われたのです。ですから、どんなに苦しくてもイエスに忠実を尽くすなら、いつかイエスと顔を合わせる時に報われると、マタイは教えているのかもしれませんが。イエスを信じるすべての人にとって、いつの日かイエスの御顔を見られるというのは大きな希望です。今、クリスチャンとして生きることがどれほど困難でも、将来私たちが受ける偉大な報いは、身体の復活とイエスと顔を合わせられることです。

次に進む前に、11-15 節に注目しましょう。

地震が起こって、墓を封じていた石が転がされた後、兵士たちはこれらの出来事のショックから我に返り、自分たちが番をしていた墓からイエスがなくなっていることに気づきました。

兵士たちは事の次第を正直に話さなければなりません。もしそうしなければ、任務をおろそかにしたとして処刑されてしまいます。

彼らは、宗教指導者たちに事の成り行きを話しました。

宗教指導者たちは、兵士たちに大金を渡して、嘘を言わせました。

兵士たちは、自分たちが眠っている間にイエスの弟子たちがやってきて、イエスの遺体を盗んだと言うように命じられました。

この嘘が、イエスの復活の証拠のひとつとなります。

15 節には、マタイがこの福音を記した頃にもまだ、イエスの遺体についてこの嘘がまかり通っているとあります。

3. あらゆる国の人々を弟子にしなさいというイエスからの命令 (16-20 節)

マタイの福音書の全体を理解しながら、この 16-20 節を理解できなければ、マタイの福音書全体のテーマを見落としたこととなります。

世界中の多くのクリスチャンが、この世で自分たちに与えられた使命が何かをしっかりと理解できないでいます。

イエスに仕えることや、マタイがここで教えたイエスの命令に従うことよりも、自分たちの必要を満たしてもらおうことばかりを考えます。

世界中の福音派の教会でアンケートを取ったとしたら、クリスチャンの教会での関わりに関しては、あらゆる国の人々を弟子とする大宣教命令が一番後回しになっているという結果が出るのではないのでしょうか。

なぜ多くのクリスチャンが、教会の一番重要な使命を優先させないのか私にはわかりません。

この箇所をしっかりと読めば、わかるかもしれません。

マタイは、5 つのことを勧めます。

1) 弟子たちは、イエスに会うために自ら出かけた。(16 節)

11 人の弟子たちは、イエスに会いに行きました。

イエスは、能力のある人以上に、自らをイエスに差し出す人に関心を持たれます。

弟子を作る者となる最初の秘訣は、イエスに自らを完全に差し出すことです。

祈ったりみことばを読んだりして、イエスに会おうとする人を、イエスは導いてくださいます。

多くの人は、イエスに自らを差し出そうとしません。

あなたはでしょうか。あなたはイエスに自らを差し出していますか。

2) イエスを礼拝する。(17 節)

復活したイエスを見て彼らがまずしたことは、礼拝です。

イエス・キリストだけを見ていました。

それが、本当に礼拝するというものの意味です。

私たちは、イエスの死と復活の重みを知れば、イエスの弟子を作る者になりたいと思うようになるでしょう。

イエスがどれほど尊いお方かがわかり、他の人にも知ってほしいと思うようになります。

3) イエスに対する服従。(18 節)

イエスは、弟子たちにしてほしいことを語る前に、ご自身の権威について教えられました。

「天においても、地においても、いっさいの権威」がイエスにあると弟子たちに告げられました。

イエスは、弟子たちがイエスの権威に謙虚に従うことを望まれます。

また、他の誰の権威のもとに入ることも望まれません。

弟子になりたければ、または弟子を作りたければ、そうなるための働きをする権威はイエスのみから与えられます。

4) 従順 (19-20 節)

ここまでの 3 つの要素を理解すれば、次は従順です。イエスは弟子たちに、「行って」「弟子と
しなさい」とおっしゃいました。

つまり、ご自身が働くことのできる器をお探しののです。

イエスの弟子たちは、復活の目撃者であり、それ以前も 3 年間イエスの教えを受けて過ごした人
たちです。

そして今、彼らはさらに多くのイエスの弟子を作るために出かけるのです。

5) 力 (20 節)

イエスからの大宣教命令の最後の要素は、聖霊の力です。

イエスは、弟子たちがどこに行っても彼らとともにいると約束されました。もちろん、人の姿で
いっしょにいることはできません。しかし、聖霊の力によって、弟子たちは弟子を作る力を得る
ことができるのです。

イエス・キリストの復活のメッセージはとても重要です。

この復活を告げ知らせるには、私たちは皆、聖霊の力が必要です。

今日、聖霊の力を主に求めて祈りましょう。